

後半のシェーンベルクを聴いてビックリした。難しくなく、流れる音楽になっている。12音技法は、鍵盤の総ての音に同じ重みを持たしているのも、無理があり、ゴツゴツしたものと思っていた。少なくとも、ポリーニさん、グールドさん、ジェイコブスさん、ビュッケさん、エルフェさん等のレコードでそう感じていたが、整然とあっさりした演奏で、メロディーが聴こえる様であった。選り抜かれた音を凝縮させた緊張感にあふれたものでなく、自然に呼吸しており、何かホッとして楽しかった。この演奏家のシェーンベルクをもっと聴きたいと思った。

ムソルグスキーでは、観客の目や耳を意識せず、没頭していた。自分の解釈で大曲を力一杯に料理しており、雄弁で、説得力があった。熱演であり、颯爽としてキラキラ輝いていた。ただ、全体に明る過ぎて、もっと暗い陰があってもよいように感じた。

「月光」はよく判らない。誰が弾いてもソウカナアと思う。第3楽章が好きで、第1楽章から徐々に速度を増していき、最後に突入するところがイナと思っている。今日の第1楽章の遅い意味は判らない。単にキレイでないが静寂な世界は判るが。

リストの「バラード第2番」は、「オーベルマンの谷」や「孤独の中の神の祝福」と同様に、ピアニストが感情を込めて、朗々とメロディーを歌うことができるもので、「愛の夢」や「ペトラルカのソネット」の延長線上にある曲だと思っている。ただ、余りなじみがなく(昔、アラウさんのレコードかコンサートか聴いた筈だが)、コンサートの5日前に、シルベスティンさんのCDを買い、十回程聴き臨んだが足らず、もっと曲を掴んでおれば、節回しやピアニストの気持ちをもっと楽しめたのにと残念に思った。コンサートで曲に対する理解が急速に進んだという状況であった。

アンコールの「アナカプリの丘」は、曲と演奏家がマッチしているのか、切れ味がよく説得力がある演奏で、違和感もなく納得できた。ブラームスのワルツは、夏の躍動感があふれ過ぎで、後半、もう少しすんだ秋を表現してくれればと思った。

シェーンベルクを聴いたとき、このピアニストには音楽的な才能がある。かなわないナア、うらやましいナアと思った。ピアノを弾ける弾けないの話でなく、音楽を理解することで、僕の知らない楽しみを知っているに違いない。感性、才能を羨ましく思った。シェーンベルクの後、聴いていてスゴク幸せに感じた。これからも、この演奏家だけが感じれるモノを教えてもらえたらイナと素直に思う。

きっと、お父さんとお母さんは、ピアノが上手な子供だと自慢なんダロウが、もっと違う次元で輝いていることを知っているのかナアと想ったりした。

---

ベートーベン：ピアノソナタ第14番 嬰ハ短調 Op.27-2「月光」

リスト：超絶技巧練習曲 第10番 ヘ短調

リスト：バラード 第2番

シェーンベルク：ピアノ曲 Op.33a

---

---

ムソルグスキー：展覧会の絵

(アンコール)

ドビッシー：アナカプリの丘「前奏曲集 第1巻」より

---